継続の輝き
～日々の暮らしの中から⑦～

よく「継続は力」と言われる。最近、単に「力」だけではなく、「輝き」を感じたことが2回あった。

まず、山口高校の同窓会誌「熱球」を読んだ時。自分より17年遅い昭和50年卒業の同窓生が、今、NHKアナウンス室でエグゼクティブアナウンサーとして活躍していると知る。

彼の名前は「山本哲也」。総合テレビで日曜の朝8時から放送している「小さな旅」を担当とある。何度か見て好感を持った番組で、今回改めて見る。

昔からの地域の暮らしの中にある、地道に刻まれてきた何気ない普段の生活の営み。その平凡な豊かさをごく自然なタッチで描く「小さな旅」。その中で山本アナウンサーが淡々と語る言葉が番組を静かに盛り上げている。

最近のテレビ番組、とりわけ娯楽番組は何かけたたましく、非現実をまき散らしているようなものが多くて余り好きではない。もちろん「小さな旅」は日曜の朝の静かな時間帯ということもあり、番組プロデューサーもそれを意識して制作しているのだろう。

その中で、山本アナウンサーの自然に溶け込んだ口調が良い。アナウンサーとして40年ぐらい継続している中から出る輝きが静かに伝わってくる。ふと、自分もアナウンサーを志して放送局に入社したことと比較する。

自分の場合、志しながらアナウンサーであったのはわずか8年。組合活動に本気になる。その内容も労使が骨肉の争いを続け、何とそこで25年間かかわる。会社や他人との争いばかりで、今は何も残っていない。

一方、山本アナウンサーのように、志した道を継続した中から輝きを感じる時、人それぞれ、いろんな生き方があるが、残念な気持ちになるのをどうしても否定出来ない。

もう一つ「継続の中から出る輝き」を感じたのは、山高時代の仲間のオペラの話だ。

以前も触れたが、彼は法曹界一筋に活躍し、今も地域の弁護士をしている。ヨーロッパを旅した時、本場のオペラを見て感激し、もっと若いころに見たかったと思う。そこで母校、山口高校の生徒を、山口県に本場のオペラが来る度に約100人を招待し続けている。

今年もシンフォニア岩国で開かれたブルガリア国立歌劇場のオペラ「カルメン」に交通費付きで100人を招いた。

恥ずかしながら、自分は本場のオペラを1度も見たことがない。友人は自分が果たせなかった若い時に本物を見ることを、今、母校の生徒に10年にわたって続けている。彼が匿名でしている、この継続した行為の中に、すごい輝きを感じるのだ。

この二つの出来事を比較して自分が卑屈になり、卑下して後悔しても何にもならない。自分の力以上に生きようと背伸びするのではないが、残された人生の中で、前向きにどんな小さなことでも継続して続ける中に、神はきっと輝きを見て下さるに違いない。

山本 哲也

普通科81期・昭和50年卒
NHKアナウンス室エグゼクティブ

ふと重ねてしまう自分がいる。「ここはええとこいねえ、また来（き）いさんやーはあ」そんな心のつぶやきを聞きながら。

同窓会誌の山本アナウンサーの紹介

歌劇「カルメン」を鑑賞して

年 組 番 名前

生徒の感想文